



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 1987年度英語英文学研究室研究会要旨

著者	同志社大学人文学会
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	44-45
ページ	395-399
発行年	1988-03
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001613">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001613</a>

## 1987年度英語英文学研究室研究会要旨

第1回 1987年6月27日(土) 於 徳照館会議室

報告者 松山信直

### 「ホーソンの *The Blithedale Romance* とメルヴィル」

Hawthorne と Melville はある一時期、比較的近くに住んで、親密な関係にあった。Melville が Hawthorne から得た刺激については、すでにさまざまに論じられているが、15歳年上の Hawthorne が Melville の作品から創作上の示唆や刺激を得たとは到底考えられない、とするのが通説だった。この研究発表は、手紙などの資料や作品の検討・比較対照によって、敢えてこの通説に挑戦したものである。Hawthorne が *The Blithedale Romance* の執筆を決意した(1851年7月末)のには、自己の体験を作品化してきた Melville の作品との出会いと、その前数日間の Melville との手紙のやりとりが深くかかわっていたという事実がある。更に、*The Blithedale Romance* の具体的な執筆開始(1851年11月23日以降)の直前には、Melville の *Moby-Dick* を贈られて読んでいた。また、この一見大きく隔ったように思える二作品の間に、フォームの上で著しい類似があること、体験談の主人公のごとくに登場する語り手 Ishmael と Coverdale の機能上の類似があることなどを考えると、Hawthorne が *The Blithedale Romance* 執筆にあたって、*Moby-Dick* から特に大きな示唆を得たことは明らかである。

第2回 1987年9月19日（土） 於 香柏館会議室

報告者 南 井 正 廣

「*Tom Jones* に於ける Blifil の讒言の意味について」

*Tom Jones* の主人公 Jones が、Blifil の讒言（他人を陥れるために、その人に関する不当な誹謗中傷を目上の人にする行為）によって、Allworthy の邸から追放されたことは、読者には周知の事実となっている。しかし、Fielding が作品の中に讒言という行為を持ち込んでいる目的やその背景となる要因に関しては、あまり論じられていない。

先ず、讒言という行為が作品に導入されている要因として、Fielding 自身の経歴に言及しておく必要がある。残念ながら、彼が Jones と同じ類の讒言の犠牲になったことを、証明するような伝記的資料は存在しない。が、彼の作家という側面に注目すると、齒に衣を着せずに物を言う作家であったために、敵対者からの口頭あるいは文書による攻撃—誹謗中傷—が彼に対して繰り返しなされていたことが判明する。*Tom Jones* に於いて、Fielding 自ら、中傷を「社会の害虫」、「毒殺にも匹敵する行為」と述べたてていることから判断すると、誹謗や中傷がその実行手段となっている讒言という行為が、Fielding にとって忌むべきものであったことは明白である。しかしながら、生半可な知識としてでなく、自らの体験を通して讒言の恐ろしさを Fielding が実感していたことも、看過することができない。その意味では、讒言は Fielding にとって卑近な行為であり、*Tom Jones* のプロットの中に組み込みやすかったとも言えるのではないか。

Blifil の讒言には、二つの目的がある。一つは、Jones から「善人としての名」を奪い、彼を悪人に仕立て上げるという目的であり、もう一つは、Jones に取って代わって Allworthy の財産や Sophia を独占するという目的である。自らの体験から、讒言を忌み嫌うべきはずの Fielding が、このよ

うな邪悪な目的を遂げさせるために、登場人物に讒言という悪質な行為をなさしめているのだから、何か特別な意図があつてのことだと考えざるをえない。

*Tom Jones* の主題の一つとして、Jones の “prudence” の獲得という問題を挙げることができよう。そして、Jones が習得した “prudence” が、過去の経験に鑑みて善悪を判断する能力に、「外見への配慮」という慎重さを加味したものであったことは、Blifil の讒言との関連で興味深い。当時、世俗的な成功のみに執着した打算的偽善者が、世を席捲しつつあった。彼らの目的は、有徳人になることにあったのではなく、有徳人に見えるように振舞うことによって立身出世することにあつた。そのために、ことさら、自らの評判に注意を払う輩であつた。そのような人々が抬頭すれば、善人と言えども、安閑としていられない。他人の眼に善人と映ずるように努力しなければ、誤解され悪人の烙印を押されかねないからである。それ故、Fielding は善悪の判断のできる有徳人になることは大切であるが、「外見への配慮」も忘れてはならないということを、Jones に、そして誰よりも、読者に、教えたかつたのだと推察される。

このような智慧を、読者に最も効果的に伝える方法として、Fielding は実例の提示を選んだのである。外見を考慮しない無分別な善玉（Jones＝読者自身）と、善良に見せている悪玉（Blifil＝打算的偽善者）と、彼らを外見からしか識別できない裁き人（Allworthy＝世間）を創り出し、讒言という悪質な行為によって、善玉が陥れられる状況をわざわざ設定し、同時代の人々に善人の生きるべき道筋を示すこと。これこそが、*Tom Jones* の中で Fielding が Blifil に讒言という卑劣な行為をなさしめている意図と言えるのではないだろうか。

第3回 1987年12月7日(月) 於 香柏館會議室

報告者 北尾謙治

“An Exploratory Study of Differences between  
Politeness Strategies Used in Requests  
by Americans and Japanese”

When a speaker asks a hearer to carry out a request, a number of factors influence the way the hearer perceives the imposition involved in the request (the *relative imposition*). These factors include the familiarity, relative status, the size of the request and various situational factors. In order to mediate the relative imposition involved in a request, the speaker varies the amount of politeness of the request.

Participants in this study were 80 American participants, 103 Japanese participants in Japan and 34 Japanese participants in the US. We asked them to rate a total of 61 requests in four different situations according to their level of politeness and frequency of occurrence in natural situations. In all four situations, the size of the request was small and the familiarity was low, but the relative status of the hearer in relation to the speaker was varied. The requests varied linguistically in the use of verb forms, modals, tenses, moods, and tags. We evaluated the different perceptions of politeness by the three groups and discussed similarities and differences in their relative ratings of politeness. In general, our findings supported theories advanced in this area and confirmed the findings of previous studies.

While the perceptions of politeness of Americans, Japanese in the US, and Japanese in Japan were generally similar, we found some

differences. For example, the Japanese participants in the US, on the average, perceived requests as being more polite than the Japanese participants in Japan did. The politeness ratings of Americans and Japanese participants in Japan showed the greatest difference, and Americans and Japanese participants in the US were the most similar. We also found some differences in ratings of various request forms. We concluded with some possible explanations for these findings and suggestions for future research in the area of politeness and second language speakers